

# 「貧者の神学 (Armenfrömmigkeit)」の 社会経済的背景に対する考察<sup>1)</sup>

魯 恩碩

## 1. 序論

現在、Rainer Albertzと Erich Zengerを含む多くの旧約学者たちが、捕囚期および捕囚期以後ユダヤ共同体によって形成された「貧者の神学 (Armenfrömmigkeit)」が存在したと主張する<sup>2)</sup>。彼らは、この「貧者の神学」が捕囚期以後、社会経済的下層民の階級意識を刺激し、当時のエルサレムの権力者たちにイスラエルの神が報復されるはずであるという独特の信仰を新たに作り出したという仮説を立てる。詩編と預言書の多くの部分<sup>3)</sup>が、この経済的疎外者グループによって、記録されたというのである。Albertzの仮説によれば、この著者グループは、当時、社会経済的権利を完全に奪われ、虐げられた貧しい小農民、羊飼、雑役労働者などであった<sup>4)</sup>。Albertzによれば、彼らは社会の片隅に追いやられ、侮蔑される下層民であり、施し物を受けながら生きる経済的弱者であった<sup>5)</sup>。Albertzは次

- 
- 1) 本論文は、*Zeitschrift für die Alttestamentliche Wissenschaft* [120, No. 4 (2008), 597-611] に掲載された拙著 “Socio-Economic Context of Post-Exilic Community and Literacy” に加筆および修正を施したものである。本論文で使われる学術誌の略号は、S. M. Schwertner, *Theologische Realenzyklopädie, Abkürzungsverzeichnis*, 1994 を参照のこと。
  - 2) Rainer Albertz, *Religionsgeschichte Israels in alttestamentlicher Zeit*, ATD/GAT 8/2 (1996), 543-575; Erich Zenger, *Die Psalmen I. Psalm 1-50* (1993), 14-15 参照。
  - 3) Albertzは、以下のテキストが、捕囚期以後ユダヤ共同体のプロレタリア階級によって書かれたと主張する。マラ記 2: 17, 3: 5, 3: 13-21、イザヤ書 29: 17-24, 56: 9-57: 21、詩編 9/10, 12, 14, 35, 40, 69, 70, 75, 82, 109, 140 など。
  - 4) Albertz, *Religionsgeschichte*, 574.
  - 5) *Ibid.*, 575.

のように主張する。

ここで、下層民は彼らに貧困をもたらした原因について、驚くほど明確に分析している。ペルシア王国の苛酷な課税政策が、彼らを貧窮に追いやっているというのである。そして、彼らの利己的な指導者たちは、この問題に対し、何の措置も取ろうとはしなかったのである。イザヤ書57章3節から5節では、下層民の指導者たちに対する非難が書かれており、指導者たちは「罪悪の子」、「不実な子孫たち」と呼ばれている。(中略) これは、指導者たちが偶像崇拜と人身御供を行ったという非難であり、下層民は指導者たちの罪深い不信仰を非難していると思われる。(中略) 三番目のテキストであるイザヤ書29章17節から24節は、明らかに預言的な性向を持った(19節)下層民グループによって書かれている。しかし、この文書は、社会的状況が以前(イザヤ書56章9節以下)よりも悪化し、下層民の生活が極めて過酷な状態になったことを反映している<sup>6)</sup>。

Albertzの仮説は、大変興味深い内容である。しかしながら、この仮説は、捕囚期以後イスラエルの社会経済的な階層構造をあまりにも単純化しているのではないであろうか<sup>7)</sup>。Albertzは、上層階級と下層階級という単なる二分法に基礎を置いた仮説に焦点を合わせて自分の理論を展開してい

---

6) Ibid., 551-553.

7) 捕囚期以後ユダヤ共同体の社会経済的階層分化についての研究は、以下の書を参照のこと。Johannes Unsok Ro, *Die sogenannte 'Armenfrömmigkeit' im nachexilischen Israel*, BZAW 322 (2002), 187-199; O. Plöger, *Theokratie und Eschatologie*, WMANT 2 (1968), 129-142; Diana Vikander Edelman, *The Origins of the 'Second' Temple: Persian Imperial Policy and the Rebuilding of Jerusalem* (2005), 34-78; Alexei Sivertsev, "Sects and Households: Social Structure of the Proto-Sectarian Movement of Nehemiah 10 and the Dead Sea Sect," *CBQ* 67 (2005), 59-78; Saul M. Olyan, "Purity Ideology in Ezra-Nehemiah as a Tool, to Reconstitute the Community," *JSJ* 35 (2004), 1-16; Jeremiah Cataldo, "Persian Policy and the Yehud Community During Nehemiah," *JSOT* 28 (2003), 240-252; David Janzen, "Politics, Settlement, and Temple Community in Persian-Period Yehud," *CBQ* 64 (2002), 490-510.

る。しかし、捕囚期以後にパレスチナで形成された地域社会の複合性は、この二元的な社会階層モデルによって、果たして説得力のある説明ができるであろうか。これまでの人類の歴史の中で、Albertzが論じているように、小農民、貧民、羊飼、雑役労働者が、神学や哲学的な議論に活発に参加し、高い文学性を持った神学文書を執筆するというようなユートピア的時代があったであろうか。本論文は、このような問いに答えようとするものである。

## 2. 古代農耕社会と文字使用能力<sup>8)</sup>

Lenskiの社会学的モデルは、捕囚期以後ユダヤ社会の社会階級構造を正確に認識するために役立つ。特に、「古代農耕社会 (advanced agrarian society)」モデルは、捕囚期以後ユダヤ社会の社会経済的状況と合致する<sup>9)</sup>。Lenskiは、技術水準が社会モデルを区分するための重要な基準であると指摘する。Lenskiによれば、古代農耕社会は、鉄冶金の発達によって特徴づけられる社会である。Lenskiによる「古代農耕社会」についての記述は、主に古代ギリシア・ローマ時代と関連したものではあるが、類似する社会経済的前提条件のため、このモデルはペルシアおよびヘレニズム時代のユダヤ社会にも適用することができる<sup>10)</sup>。したがって、本論文では、捕囚期以後のユダヤ共同体社会が、Lenskiの社会モデルにおける古代農耕社会の仕組みに当てはまるという認識に基づいて分析を行いたい。

---

8) 本論文における文字使用能力という用語は、英語のLiteracyの翻訳であり、読解力、筆写能力、執筆能力などを示す表現である。古代ユダヤ社会における文字使用能力に対する概要は、以下の書を参照のこと。Ian M. Young, "Israelite Literacy: Interpreting the Evidence. Part I," VT 48 (1998), 239-253; William M. Schniedewind, "Orality and Literacy in Ancient Israel," RSIR 26 (2000), 327-332; Joachim Schaper, "Exilic and Post-Exilic Prophecy and the Orality/Literacy Problem," VT 55 (2005), 324-342.

9) Gerhard Lenski, *Power and Privilege: A Theory of Social Stratification* (1966), 190-296 参照。

10) Lenskiは、古代農耕社会における社会階級を次の9種類のカテゴリーに分類する。統治階級 (Ruling Class)、支配階級 (Governing Class)、家臣階級 (Retainer Class)、祭司階級 (Priestly Class)、農民階級 (Peasant Class)、商人階級 (Merchant Class)、職人階級 (Artisan Class)、没落階級 (Unclean and Degraded Class)、放棄階級 (Expendable Class)。

捕囚期以後ユダヤ共同体の社会経済状態について、Albertzは次のような考察をしている。

下層民が債務と貧窮の渦に巻き込まれるにつれて、彼らが上層階級の二つの陣営とは異なる社会的危機を経験したことは当然であった。上層階級にとって収益性の高い事業や社会倫理に関する問題が、下層民にとっては生存に対する大きな脅威となった。下層民は、彼らの指導者たちがペルシア人と共謀しているという事実が明らかになるにつれて、全ての特権階層は、強大な隣国の力を借り、自己利益のみを追求する背信者ではないかという疑念を抱くようになった。(中略) よって、私たちはこのような社会的危機が下層階級に、深い疎外感と絶望感を与えたと仮定しても良いであろう<sup>11)</sup>。

私は、捕囚期以後ユダヤ共同体の社会経済的状况に対する Albertz の鮮やかな描写に対し、全般的に同意する。しかし、彼がこのような社会経済的状况を前提に下す結論には異存がある。Albertz は、主に抑圧された下層民によって構成された下層階級が、「預言的性向の小分派 (Prophetische Konventikel)」を形成したと主張する。Albertz は、下層民が聖殿で捧げる祭儀から分離し、彼らだけの祭儀機構を作り上げ、上層階級の伝統的な神学に対抗し、彼ら特有の社会経済的関心を表現する新しい神学を生み出したと主張する<sup>12)</sup>。しかし、古代農耕社会の社会経済的状况について考えて見よう。社会学では、バビロン捕囚期以後のパレスチナを含む古代農耕社会における経済的生産物は、社会階層によって不平等かつ不当に分配されたという見解が一般的である。Lenski は次のように言う。

通常、古代農耕社会における経済的余剰は、統治階級と彼らの家臣に

11) Albertz, *Religionsgeschichte*, 549-550.

12) *Ibid.*, 572-576.

分配された。その結果、古代農耕社会は広大な地域に根を広げていく木や植物のような構造となった。これは、経済的余剰を段階的に移送させ、都市の住民が最終消費者になるシステムを構築したことを意味する。しかし、このシステムの外側には数千、数十万の小さな農村があり、それぞれの村には、数百人の人々が暮らしていた<sup>13)</sup>。

このような経済的不平等は、農村社会を絶望的な経済状況へと追い込んだ。Lenskiは、次のように記述する。

歴史を通じて、大多数の小農民が、最低限の生活必需品さえも揃えることのできない状態で暮らしていた。(中略) しかしながら、その生活は極度に原始的であった。(中略) 家の中には、何脚かの椅子とテーブル、一張羅や貴重品を入れて置くための箆笥が全てであった。寝台がある家は珍しく、ほとんどの小農民は、藁で覆われた土間で睡眠を取った。他の財産といえば、わずかな調理器具だけであった。しかし、大半の小農民の生活水準は、この程度にも満たないものであった。小農民は、度々激しい経済的搾取を受けた。そのため、生計を営むことが不可能となった小農民は、耕作した土地を捨て、逃げることを余儀なくされた<sup>14)</sup>。

古代農耕社会における都市居住者の割合は、全人口のごく一部であった。社会階級による都市居住者と農村居住者の明確な区別は、ネヘミヤ記11章1節でも見ることができる。

民のつかさたち (טַרְיָוִי) はエルサレムに住み、その他の民はくじを引いて、十人のうちからひとりずつを、聖都エルサレムに来て住ませ、

---

13) Lenski, *Power*, 206.

14) *Ibid.*, 271.

九人を他の町々に住ませた<sup>15)</sup>。

エルサレムは、このように指導者たちと少数の選ばれた人々だけが居住することを許された場所であった。都市の農村に対する支配的優位は、政治、経済、宗教、文化などの生活の各領域を通じて強固に確立された<sup>16)</sup>。その結果、富と権力は都市に集中するようになった。古代農耕社会で農村の多くの人々は、飢えによる死と生存の境界線を行き交う極度の貧困生活を過ごした。その一方で、都市居住者は豊かな余剰利益や奢侈品を享受することができた<sup>17)</sup>。Lenskiは次のように述べる。

富と余暇があり、軍事技術や優雅な生活のための教養を身に付けることができる都市エリートと比べ、農民は、行儀作法、教育、戦闘技術、そして、文字教育を受ける機会すら与えられなかった。それゆえ、都市エリートと農民の格差は生活様式の違いによって、より一層深まった<sup>18)</sup>。

古代農耕社会の歴史において、多くの小農民は、地主と国家に総生産の30%から70%に上る税金と小作料を支払わなければならなかった<sup>19)</sup>。下層階級にあって、もう一つの労苦は、強制的な労役であった<sup>20)</sup>。強制労働は農村の下層階級に、公共事業である土木工事や軍役という形で課された<sup>21)</sup>。エズラ記およびネヘミヤ記(エズラ記3: 8-4: 6, 6: 13-15、ネヘミヤ記3: 1-4: 23, 6: 15)では、捕囚期以後にイスラエルの小農民が負わされた強制労働量が、18世紀フランスにおける農民の強制労働量と比べてみても、決して少なく

15) 口語訳。

16) Lenski, *Power*, 267-268.

17) *Ibid.*, 51.

18) *Ibid.*, 273.

19) *Ibid.*, 267-268.

20) *Ibid.*, 268-269: 「例えば、18世紀フランスの小農民は、毎年12日間の王に対する賦役を課せられ、毎週数日間の領主に対する賦役を課せられた。」

21) Ekkehard Stegemann, *The Jesus Movement: A Social History of Its First Century*, trans. O. Dean, 1999, 49 参照。

なかったという事実を明確に示している<sup>22)</sup>。さらに、小農民を苦しめたもう一つの原因は、不作と飢饉であった。Stegemannは次のように述べている。

それゆえ、穀物の不作は賃借人に負担を課した。こうした壊滅的な不作の結果は、ヨセフスによって記録されている。彼は、小農民が翌年に着る服も、種蒔きの種も無い状態にあったことを記述している。ヨセフスは、多くの飢饉がB.C. 1世紀頃にあったと証言している。さらに、クラウディウス帝統治下であった紀元後46年から47年の間に起こった大飢饉に対する報告も存在する。したがって、長年の不作により多くの農家の人々が飢えに苦しんだと概括することができる。さらに、当時、農村の6人から9人の一家族を養うために必要な最小限の土地が、17エーカーであったと仮定すると、たとえ豊作の年であっても、十分な食糧を供給することができなかったということも理解できる。(中略) 小農民は一切の記録を残してはいない<sup>23)</sup>。

古代農耕社会において、資源の中央集権化、強制労働、度々発生する自然災害は、小農民の貧窮を深める要因となった。しかし、これらが貧困の原因の全てではなかった。Stegemannが分析しているように、古代農耕社会では、文字教育が上層階級と下層階級を区別するために使用される最も重要な社会的手段の一つであった。

貨幣と文字の発明は、農耕社会の経済制度の発展に極めて重要なものであった。しかしながら、貨幣と文字の使用が、社会的支配のための道具として使用されたという事実を認識することが重要である。なぜならば、貨幣のほとんどが都市で使用され、文字についても小農民が居住する農村よりも少数のエリートが居住する都市で使われていたか

---

22) Lenski, *Power*, 268-269 参照。

23) Stegemann, *Movement*, 46-47.

らである。このように、都市と農村の格差はさらに拡大していった<sup>24)</sup>。

Pattison は、文字使用能力の特性について、殊に古代農耕社会における文字使用能力がどのような特性を持っていたかについて次のように雄弁に述べている。

全ての社会が同じ方法で文字を使用しているわけではない。しかし、文字使用能力は常に権力と結びついている<sup>25)</sup>。

古代農耕社会における文字使用能力は、非常に高尚な技術であり、都市に居住する 6% から 7% の少数者だけが持つ極めて希少な特権であった<sup>26)</sup>。言い替えれば、古代農耕社会における文字使用能力は、政府が大衆の文字使用能力向上に無関心であり、非識字者への文字教育に対する政府の支援が全く無かったという点において、現代の状況とは根本的に異なった<sup>27)</sup>。

このような政府の文字教育に対する無関心さは、非識字者や限られた文字読解能力を持つ人々が、偏見を受けることなく、社会で機能していた時代の社会状況を反映している。重要な技術の大部分は書物からではなく、徒弟制度を通して、口述によって伝えられた<sup>28)</sup>。

---

24) Ibid., 13. および, Lenski, *Power*, 207-208 参照: 「文字は初期農耕社会で、次第に複雑になっていく経済的問題を解決するための貨幣のように、都市の上流階級によって開発された。(中略) 文字は学識を備えた少数の識字者と大多数の非識字者との間に、大きな文化的格差をもたらすことにより、支配階級と一般民衆の従来格差をさらに広げた。古代農耕社会において、文字使用能力を持つ人々はごくわずかであったことは一般的であり、これは古代農耕社会を文字発明以前の原始採集経済的社会や、文字使用能力が一般化された産業社会と区別する上で、重要な特徴である。」

25) Robert Pattison, *On Literacy: the Politics of the Word from Homer to the Age of Rock* (1982), viii.

26) Lenski, *Power*, 207-266.

27) Ann Ellis Hanson, "Ancient Illiteracy," in: J. H. Humphrey (ed.), *Literacy in the Roman World* (1991), 162.

28) Ibid.

ゆえに、私たちは古代農耕社会において文字使用能力が、農村地域の下層階級と都市地域の上層階級の間に大きな境界線を形成していたと結論づけても良いであろう<sup>29)</sup>。Harrisは古代農耕社会で、大衆が文字使用能力を備える妨げになった「他の技術的条件」を次のように述べている。

しかし、一般民衆が文字使用能力を得ることはなかった。そして、筆写程度の文字使用能力ですら、特定の限られた環境以外では習得が困難であった。古典的な文明では、最も発展していた時代でさえ、識字率を高めるための社会的条件が欠けていたため、私たちは当時の大部分の人々が非識字者であったという事実を認めなければならない。(中略) したがって、一般民衆の文字習得が可能な教育機関の欠如 — 何よりも政府支援を受ける学校の不足 — これが決定的な問題であった。(中略) 多くの地域で、あらゆる階層の人々にとって便利な筆記具は非常に高価であった<sup>30)</sup>。

当時の歴史的な状況を明確に立証することができる史料が不足しているため、ペルシア時代後期のユダヤ社会について研究する現代の学者たちは、信頼性のある歴史の再構成という不可能に近い課題に直面するしかない。しかし、教育機関の不足や政府支援を受ける学校の不足、安価な筆記具の不足などの古代農耕社会に共通した社会条件が、捕囚期以降のユダヤ社会にそのまま適用できると仮定するのが妥当であろう<sup>31)</sup>。さらに、当時の文字使用能力は単純な技能ではなく、テキストに関わる複雑な技術の集合体で

---

29) 古代農耕社会における文字使用能力の機能に対する詳しい記述は、William V. Harris, *Ancient Literacy* (1989), 25-42を参照。

30) *Ibid.*, 13-15.

31) Youngによれば、申命記的歴史書に頻繁に登場する文字使用についての言及は、捕囚期および捕囚期以後ユダヤ社会で文字が広く使用されたという証拠にはならない(Young, *Evidence*, 249-253)。Youngはまた、金石学的な典拠は、古代ユダヤ社会における文字使用能力について信頼するに値する証拠にはならないと述べる。「大量の文書が、ごく少数の文字使用者によって作成された。」(*Ibid.*, 240).

あった。文字使用能力の技術的な難しさ以外にも様々な機能的な複雑さが存在する。古代の文字使用能力は、機能的に次の三種類に分類することができる<sup>32)</sup>。

1. 読解力
2. 筆写能力
3. 執筆能力

これら各々の分野は、当時、互換することができない能力であった<sup>33)</sup>。職業的筆写者の文字使用能力は、複写能力と呼ぶことができる。「筆写することは、新しいテキストを執筆するよりも少ない能力で行うことができる仕事であるため、経験が少ない文字使用者たちに割り当てられていた。」<sup>34)</sup> ゆえに、筆写者の筆記能力と創作者の執筆能力は区別することができる。

Goodmanによれば、聖書読解力はローマ時代のユダヤ社会における主要な教育目標の一つであった。しかし、「執筆能力を持つ人はそれほど多くはなかった。それは執筆能力が重視されなかったからではなく、それとは逆に、宗教的なテキストを作り出すことは高度で専門的な仕事であると思われたからであった。」<sup>35)</sup>

前述したように、捕囚期以後ユダヤ社会が直面した社会経済的環境のために、生存を脅かされた下層階級にとって、読解や筆写程度の基本的な文字使用能力を習得することでさえ、非常に困難であった。このような状況の中で、小農民、牧者、職人などの捕囚期以後ユダヤ社会の下層階級によって、マラ記 2 章 17 節、3 章 5 節、13 節-21 節、イザヤ書 29 章 17 節-24 節、56 章 9 節-57 章 21 節、詩編 9 編-10 編、12 編、14 編、35 編、40 編、69

---

32) M. D. Goodman, "Texts, Scribes and Power in Roman Judaea," in: Alan K. Bowman and Greg Woolf (ed.), *Literacy and Power in the Ancient World* (1994), 99-107.

33) Ibid.

34) Hanson, "Illiteracy," 176.

35) Goodman, "Texts," 99-100.

編、70編、75編、82編、109編、140編などの高度な執筆能力が見られる旧約聖書のテキストが書かれたことについて、疑問を持つことは当然ではないだろうか。上述したテキストは、筆写者の筆記能力を遥かに超える複雑性と文学性の高さを示している。しかしながら、貧しい小農民の農場や職人の工房が、このような高度な文学性を持った神学的文書を作り出すために相応しい場所であったとは考え難い。そこで、古代農耕社会において、小農民や職人などの下層階級が、当時どのように見なされていたかについて詳しく見てみたい。例えば、Ben Sirachは次のように記録している。

学者の知恵は存分に暇があって生まれるものであり、実務から開放されている者が知恵を得ることができる。鋤を握り、突き棒の柄を自慢し、牛を追い、仕事に追われ、話題といえば仔牛のことといった人間がどうして知恵を得られようか。彼は畝をおこすのに一生懸命で、夜分遅くまで起きていて雄牛に飼料をやる。夜を日に継いで精出す大工や大工の棟梁はみなこの類である。(中略) 鉄床のそばに座り込んで、鉄細工をしきりと眺めている鍛冶屋もまたしかり。(中略) 陶工も同様で、仕事場に坐りこみ、足で轆轤を転し、四六時中熱心に仕事に向かい、製品をきちんと数えあげる。(中略) しかし、彼らが公けの討論に出席を求められることはない。世間の他の人よりも抜きん出ることなく、裁判官の席を占めることなく、司法上の取り決めも解しない。教養や法律のこととなるとばつとせず、箴言も苦手である<sup>36)</sup>。

Ben Sirachによれば、全ての肉体的労働から完全に自由な人間だけが、聖書を研究することができ、裁判官、助言者、聖書解釈者として活動することができた。小農民、牧者、職人は適していないと思われた<sup>37)</sup>。このよう

---

36) ベン・シラの知恵38: 24-33、村岡崇光訳、日本聖書学研究所編『旧約外典Ⅱ』(1977) 173-174頁。

37) Stegemann, *Movement*, 26.

な見解が、捕囚期以後ユダヤ社会の宗教的教師や律法学者 (γραμματεὺς)<sup>38)</sup> に対する一般的な認識であったとすれば、小農民などの下層階級は、学問や文学活動への参加を徹底的に排除されたと推測することができる。このような社会の中で、小農民が新しい神学の創出や再構築、そして、その記録に一身を捧げたということは想像し難いことである。さらに、捕囚期以後、聖書ヘブライ語は日常的に使用される言語ではなかった。Knaufは次のように指摘する。

聖書ヘブライ語は、ペルシア時代の教育と文学のための言語であった。これに対し、一般民衆は、既に中世ヘブライ語の初期形態を使用していた<sup>39)</sup>。

このように、ペルシア時代の聖書ヘブライ語は、中世ヨーロッパにおけるラテン語のようであった。

### 3. 捕囚期以後ユダヤ社会の社会経済的状況

経済的観点から見れば、捕囚期および捕囚期以後の期間が、イスラエル史の中で最も暗い時期であったということは、多くの聖書学者たちが認め

38) マタイによる福音書 2: 4, 5:20, 7: 29, 8: 19, 15: 1、マルコによる福音書 1:22, 2:6, 3:22, 7:1、ルカによる福音書 5: 21, 6: 7, 11: 44, 19: 47、ヨハネによる福音書 8:3、使徒行伝 23: 9、コリント人への第一の手紙 1: 20 参照。

39) A. Knauf, *Die Umwelt des Alten Testament*, NSKAT 29 (1994), 206 および、以下の書を参照のこと。Gary A. Rendsburg, "Some False Leads in the Identification of Late Biblical Hebrew Texts: The Cases of Genesis 24 and 1 Samuel 2: 27-36," *JBL* 121 (2002), 23-46; A. Hurvitz, "Can Biblical Texts Be Dated Linguistically? Chronological Perspectives in the Historical Study of Biblical Hebrew," in: A. Lemaire (ed.), *Congress Volume, VT.S 80* (2000), 143-160; idem, "The Historical Quest for 'Ancient Israel' and the Linguistic Evidence of the Hebrew Bible: Some Methodological Observations," *VT* 47 (1997), 301-315; Ronald L. Bergey, "Post-Exilic Hebrew Linguistic Developments in Esther: A Diachronic Approach," *JETS* 31 (1988), 161-168; Ernst Würthwein, *Der Text des Alten Testaments: Eine Einführung in die Biblia Hebraica* (1988), 90.

ている。

民衆は精神的、政治的指導層を失い、過酷な経済的束縛を受けるようになった<sup>40)</sup>。

Donnerは、捕囚期間にパレスチナに残された民衆が、強大な隣国に仕える背信者と見なされていた地方官吏に納める間接税と、強制労働に苦しんだと指摘する<sup>41)</sup>。捕囚期および捕囚期以後ユダヤ共同体が直面していた惨めな境遇は(経済的にだけでなく宗教心理的な面でも)、哀歌に描かれている<sup>42)</sup>。ネヘミヤ記に登場する救いを求め叫ぶ人々についても言及しておきたい。

ある者は、「私たちには息子や娘が大ぜい<sup>43)</sup>いる。私たちは、食べて生きるために、穀物を手に入れなければならない」と言い、またある者は、「このききんに際し、穀物を手に入れるために、私たちの畑も、ぶどう畑も、家も抵当に入れなければならない」と言った。またある者は言った。「私たちは、王に支払う税金のために、私たちの畑とぶどう畑をかたにして、金を借りなければならなかった。」<sup>44)</sup>

この記録から、捕囚期以後の時代における貧困層の悲惨な窮状と絶望的な状況を知ることができる。上記の引用文で「王に支払う税金」というのは、当然ながら、ペルシア王に支払う税金を意味する。B.C. 456年から455年に至るまで、利率は最低でも12.5%に達し、ユダヤの大部分の地域では、40%から60%の利率が一般的であったという証拠がいくつかある<sup>45)</sup>。「経

---

40) H. Donner, *Geschichte des Volkes Israel und seiner Nachbarn in Grundzügen*, ATD/GAT 4 (1987), 387.

41) *Ibid.*, 388.

42) 哀歌 1: 3.5-6.18, 2: 15.20-21, 4: 10, 5: 2.5.10-12.18などを参照のこと。

43) BHSは、עֲבִיבִים (担保にする)と読むことを提案する。

44) ネヘミヤ記 5: 2-4、新改訳。

45) Jon L. Berquist, *Judaism in Persia's Shadow: A Social and Historical Approach* (1995), 109.

済崩壊は、(ペルシア) 帝国の植民地全域で起こっており、ユダヤ地域も例外ではなかった。」<sup>46)</sup> Berquistは、ネヘミヤ記5章2節から4節の記録が、ギリシアやその他の地域で、ユダヤ人の子供が売買された奴隷貿易を暗示すると解釈する<sup>47)</sup>。このような社会的背景の中で、小農民は、重税を正当化し、ペルシア王に支払う税金の取り立てに躍起になっている上層階級に蔑意と憎しみを抱くようになったと思われる。捕囚期以後ユダヤ共同体の威信は、従属経済システムにより深刻な危機に直面していた。

このように、上層階級は、同胞が植民経済システムにより搾取を受けることは考えず、安易にペルシアに従属することを理想としていた。捕囚期以後ユダヤ社会の上層階級は、彼らの社会正義に対する無関心さゆえに激しい非難を受けたことは当然であった。彼らは、下層民の経済的・社会的苦境を利用し、自己利益のために強大な隣国に従属したことによって、捕囚期以前の支配階級よりもさらに激しい非難を受けた。小農民が債務奴隷として売られ、かつてないほどの貧困に陥っている状況を目の当たりにした神学者グループにとって、富者と上層階級は、「רשעים」(伝統的な罪人)のイメージと重なった。この神学者グループの観点では、捕囚期以後ユダヤ共同体社会の中で、経済的利益や富は、罪人の不浄な幸福を意味した。それゆえに、この神学者グループは自分たちを「貧者」と称した。これは、自分たちが支配階級とは反対側に立っているということを強調するためであった。彼らの用語で「貧者」と言う表現は、「עניים」(伝統的な義人)のイメージと連結されるようになった。この神学者グループは「貧者の神学」を形成するテキストを執筆、編集することによって、旧約聖書の形成史に深い神学的足跡を残した<sup>48)</sup>。しかし、この神学者グループが社会経済的な意味において、小農民や職人などのような当時の極貧階層に属したのかどうかについては、さらに深い研究が必要である。

46) Ibid.

47) Ibid.

48) マラ記 2: 17, 3: 5; 13-21、イザヤ書 29: 17-24, 56: 9-57: 21、詩編 9/10, 12, 14, 35, 40, 69, 70, 75, 82, 109, 140参照。

それでは、この「貧者の神学」に関するテキストを執筆、編集、そして伝承した人々は、果してどのような人々であったのだろうか。Albertzの仮説に異議を唱える理由については前章で既に述べたが、ここでは、そのいくつかの代表的な理由を再度確認しておきたい<sup>49)</sup>。様式史的な観点からだけでなく、伝承史的な観点からも考察すれば、貧者の神学を反映しているテキストである詩編25編、34編、37編、62編、73編などを見れば、これらの文書が、高度な文学性と神学知識を表現していることは明らかである。それだけではなく、「著者は極めて教養のある作家である。」<sup>50)</sup>そして、これらの文書は、ある特定の読者との「意思疎通を目的に」<sup>51)</sup>記述されたのである。

読者は、非常に洗練された人々であると考えer必要がある。例えば、相互参照、語彙の多義性、語呂合わせ、連続する短詩によってメッセージを強める手法などを理解することができる人々である。(中略)したがって、極貧層の小農民を含む全てのイスラエル人が、このような高い文学性に到達することができたと想定しない限り(当然ながら、これは極めて非現実的な仮定であるが)、特定の社会階層が他の階層よりも、(この文書の著者になるための)高い可能性があったと結論づけざるを得ない<sup>52)</sup>。

Lenskiによる9段階の社会階層モデル(統治階級、支配階級、家臣階級、祭司階級、農民階級、商人階級、職人階級、没落階級、放棄階級)のうち、果たして、どの階級が、この神学的文書が表す高度な文字使用能力を備えていた「可能性が高い」階級であろうか。該当する著者グループは、少なくとも次の必要条件を満たさなければならない。

---

49) この問題に対する詳しい論証は拙著 *Armenfrömmigkeit*, 194-199を参照のこと。

50) Ehud Ben Zvi, *A Historical-Critical Study of the Book of Zephaniah*, BZAW 198 (1991), 353.

51) Ibid.

52) Ibid.

- a) 著者グループは、現状維持を主張する統治階級や支配階級には属さなかった。なぜならば、「貧者の神学」に関するテキストは、支配体制に抗う終末論的色彩を強く反映しているからである<sup>53)</sup>。
- b) 著者グループは、常に生存を脅かされた下層階級には属さなかった。
- c) 著者グループは、古典ヘブライ語を用い、高度な神学文書を執筆することができる優れた知識と熟練した文字使用能力を持つ人々であった。

上記の基準に合致すると考えられるのは、レビ人<sup>54)</sup>やハシディム<sup>55)</sup>などの祭司階級である<sup>56)</sup>。例えば、レビ人やハシディムは、「コハニム」<sup>57)</sup>と比較すれば、下級祭司であったため、捕囚期以後ユダヤ共同体の上流階級には属さなかった。しかしながら、彼らは、高度な文学性を持つ神学文書を創作するという条件を満たすことができる優れた神学者たちであった<sup>58)</sup>。Lenskiは次のように述べる。

祭司階級は(古代農耕社会において)、政治的エリートや社会全体のために大きな役割を果たした。文字使用能力が稀であった社会の中で、祭司は熟練した文字使用能力を必要とする管理業務を行う要請を多く

53) Ro, *Armenfrömmigkeit*, 49-75, 97-112, 182-203を参照のこと。

54) エズラ記 2: 40, 3: 9-12, 6: 16, 8: 30、ネヘミヤ記 3: 17, 7: 43, 8: 11, 10: 28参照。

55) マカバイ記上 2: 41, 7: 13、マカバイ記下 14: 6参照。

56) ハシディムに関する研究は、非常に広範囲にわたる研究テーマである。この研究課題に関する概要は、Ro, *Armenfrömmigkeit*, 34, 193を参照のこと。Albertzによれば、ハシディムは聖殿の書記官(Tempelschreiber)であるユダヤ宗教グループであった(*Religionsgeschichte*, 599)。Albertzは、捕囚期以後ユダヤ社会におけるレビ人とハシディムは、ほぼ同一であると言えるくらいの密接な関係にあったと分析する(*Religionsgeschichte*, 598-620)。

57) エズラ記 2: 36, 3: 2, 6: 9、ネヘミヤ記 3: 22, 5: 12, 7: 64, 12: 41参照。

58) Karl-Friedrich Pohlmann, „Esra als Identifikationsfigur im Frühjudentum,“ in: Frank-Lothar Hossfeld (ed.), *Das Manna fällt auch heute noch* (2004), 488 参照。

受けた<sup>59)</sup>。

しかしながら、祭司階級の「社会全体」に対する貢献と弊害については、注意深い考察が必要である。祭司たちは、統治階級を支援し、正当化することで不平等な社会構造の維持を助長し、自らが掲げる宗教的理想の実現にも失敗することが多くあった<sup>60)</sup>。それでもなお、多くの場合は、特にユダヤ・キリスト教的伝統の中で、祭司階級は下層階級の利益を守り、暴政と不正に立ち向かった<sup>61)</sup>。特に、下級祭司であったレビ人と、上級祭司であった「コハニム」との間には度々争いが生じた。

結論として、「貧者の神学」に関するテキストを執筆した著者グループは、経済的貧困者ではなかった<sup>62)</sup>。著者グループは、当時、権力を握っていた支配階級によって排除され、権利を剥奪されたと感じた祭司グループに属する人々であった。彼らは、経済的弱者に共感を覚え、極貧階層の窮状を代弁したのであった。捕囚期以後ユダヤ共同体の社会経済状況は、従属経済と極度の抑圧、そして非人道的搾取により深刻な悪化を招いた。このような状況の中で、経済的弱者を擁護した下級祭司たちの動機は、様々な側面から説明することができるであろう。それは、上級祭司と下級祭司の間にある神学的な競争意識であったかもしれない。または、貧困に苦しむ人々の惨状が、下級祭司たちの心を痛めたからであったかもしれない。または、下級祭司たちの相対的剥奪感が、下層階級が苦しむ状況と相重なったからかもしれない。または、上述した全ての理由から起こったのかもしれない。私は、下級祭司たちが、経済的弱者と自分たちを同一視したことは、経済的な理由だけではなく、神学的な理由にも起因したと考える。つ

---

59) Lenski, *Power*, 260.

60) *Ibid.*

61) *Ibid.*, 263.

62) Karl Christ が論証したように、古代農耕社会でも中流階級が存在したと考えるのが正しい。Karl Christ, „Grundfragen der römischen Sozialstruktur,“ in: W. Eck et. al. (eds.), *Studien zur antiken Sozialgeschichte*, FS F. Vittinghoff (1980), 216-217 参照。レビ人とハシディムは、捕囚期以後ユダヤ社会の中流階級層に属した。

まり、著者グループは、経済的弱者の代弁のみならず、自分たちの独特な神学を提唱しようとしたのである。特に、自らを「貧者」と称する時、彼らはこの用語をほとんどの箇所、隠喩的、人間学的な意味<sup>63)</sup>で使っている(神の前での貧しさ、靈性における貧しさ、社会的権力における貧しさなど)。歴史的観点から見れば、著者グループは、下級祭司であったレビ人やハシディムであると考えることができる。

#### 4. 結論

全ての理論には、ある程度の推論的部分が存在する。しかし、どの理論が既存の事実により適合するか、どの理論が他の理論と比べ、既存する歴史資料により少ない修正と訂正を要するかということが、より妥当性のある理論を判断する基準となる。捕囚期以後ユダヤ社会の歴史研究において、明確に立証されたこの時代の史料は不足している。したがって、旧約聖書のテキストを含む数少ない既存の史料から、説得力のある学術的な仮説と理論を立てることは大変困難である。そのため、捕囚期以後ユダヤ共同体における社会階層について、学者たちの理解は混乱を極めており、とりわけ、Albertzの理論は歴史的事実と照合しないだけでなく矛盾している<sup>64)</sup>。この論文で、私はこのような混乱を修復し、より妥当性のある捕囚期以後イスラエル史の再構成に寄与する社会階級理論を提案しようと試みた。

私の仮説は、Albertzが以下で、「驚き」と表現する時、その「驚き」の歴史的背景に対し、より明確に説明をしている。

ここで、下層民は彼らに貧困をもたらした原因について驚くほど明確

63) 貧者の神学に深く影響を及ぼした悲観的な人間観については、Ro, *Armenfrömmigkeit*, 17-21を参照のこと。

64) 本論文の第2章: 古代農耕社会と文字使用能力を参照のこと。

に分析している<sup>65)</sup>。

この「驚き」に対して、私は、新たな神学を生み出す時間と経済力を持っていなかった下層階級が「貧者の神学」を執筆したのではなく、レビ人やハシディムなどの中流階級層が「貧者の神学」を生み出したという仮説を立てることによって説明を行った。

ペルシア時代のユダヤ共同体社会における文字使用状況とは異なり、聖書時代以後のユダヤ史においては、文字使用能力は、貧しい(男性)ユダヤ人でさえ身に付けなければならない社会規範となった<sup>66)</sup>。しかし、このような現象は、ラビ的ユダヤ教の発展に伴って生じた現象であり、捕囚期直後の下層民は、まだ文字使用能力を持っていなかったと推論することが妥当である。それでは、下層民が文字使用能力を備えていなかったことは、彼らが「貧者の神学」を口述によっても作り出すことができなかったということの意味するものであろうか。私はそうではないと考える。「貧者の神学」が下層民によって口述で作られた後に、より経済的に裕福な社会階層によって、文書として記録された可能性もあるのではないであろうか。私は、十分に有り得ることであると考える。ここで、私は、下層民に無かったものは、あくまでも文字使用能力であったということを強調しておきたい。これは知性や霊性が劣っていたという意味ではない<sup>67)</sup>。

私たちは、今なお「支配者の声だけが響き渡る」<sup>68)</sup>世界で生きている。Brechtの詩は、未だ廃れることはない。このような社会経済的状况の中で、不条理な環境ゆえに経済的弱者が奪われた権利(文字使用能力)が、彼らに

---

65) Albertz, *Religionsgeschichte*, 551-552.

66) Goodman, "Texts," 99-107; Schaper, "Literacy," 328; Knauf, *Umwelt*, 206 参照。

67) 捕囚期以後の下層階級が「貧者の神学」の著者ではないという筆者の主張に対して、社会経済的下層階級の神学的能力を無視していると Gerstenberger は反論する。Erhard Gerstenberger, "Review of Johannes Unsok Ro, Die sogenannte 'Armenfrömmigkeit' im nachexilischen Israel," *Review of Biblical Literature* 5 (2003), 214 参照。

68) „Keine Stimme ertönt außer der Stimme der Herrschenden.“ Bertolt Brecht, „Lob der Dialektik,“ *Werke: Große kommentierte Berliner und Frankfurter Ausgabe* 11 (1988), 237 参照。

あったと強引に仮定することが正しいであろうか。そのように仮定することが、現代社会の富と機会をより平等に分配し、経済的弱者の尊厳を認めることに繋がるであろうか。私たちが経済的弱者の貧困の悲惨さを美化し、それに脚色を施すような形で、彼らが直面している窮状から目をそむけ続ければ、それは現状に何の変化ももたらさない「知的な自己満足」<sup>69)</sup>や浮薄な「勝利主義」<sup>70)</sup>に過ぎないであろう<sup>71)</sup>。

私たちは、歴史の事実に対する率直な記述と包み隠しのない検証を通じて、貧しい人々が直面する状況を正確に認識することにより、歴史的真相を人為的に脚色することでは得られない深い洞察を得ることができる。言い替えば、ありのままの歴史的真相を受け入れることによって、私たちはより多くのことを学ぶことができるということである。また、真の改革は、現状に対する誠実かつ的確な評価から始まるという点も忘れてはいけない。

それでは、現状とは何か。私は、現状とは「苦痛」という一語に要約され、特徴づけることができると考える。神的理想と人間的現実の間には、いつも苦しみが存在する。急速に進み拡大してゆく現代の経済構造の不平等やその分配システムの不条理さが生み出す痛みは、人間の良心がどのようなものであるべきかを私たちに問いかけているのである。

多くの経済学者や神学者たちによって、現代の新自由主義的な世界経済

69) Gustavo Gutierrez, *A Theology of Liberation*, trans. Sister Caridad Inda and John Eagleson (1988), 174 参照。

70) Ibid.

71) 捕囚期以後の下層階級の文字使用能力に対する一部の聖書学者たちの態度に対して、筆者がここで批判しようとする点は、貧しいという社会経済状態と、その中に置かれている貧しい人々という異なるカテゴリーを彼らが混同しているという事実である。Gustavo Gutierrezが的確に指摘しているように、経済的に貧困である社会状態と、その貧困状態の中にいる人々はより明確に区別されるべきである。貧しい人々の霊性は尊重されなければならないが、経済的貧困状態、特に第3世界での強制的な経済的貧困は、今日の経済システムにおける搾取メカニズムの論理的帰結にすぎない。私は、一部の神学者たちによる、貧しい人々の霊性と経済的貧困を混同する風潮に警鐘を鳴らしたい。なぜなら、このような混同は、経済的貧困そのものを霊性の必須条件として称え、神学的な正当化論理として利用される危険性があるからである。

システムに関する問題と負の遺産については十分に論じられているので、これ以上詳しく説明する必要はないであろう<sup>72)</sup>。21世紀の神学は、経済的貧困を美化し、理想化してはならない。むしろそれらに対し、問題提起し、その悲惨さを告発し、貧困撲滅に取り組まなければならない。

しかし、わたしは貧しく苦しんでいます。神よ、あなたの救いがわたしを高い所に置かれますように<sup>73)</sup>。

---

72) 以下の書や論文を参照のこと。Hans Küng, *Weltethos für Weltpolitik und Weltwirtschaft* (1997), 217-247; Jung Mo Sung, "Economics and Theology: Reflections on the Market, Globalization and the Kingdom of God," in: Arno Tausch et. al. (eds.), *Global Capitalism, Liberation Theology and the Social Sciences: An Analysis of the Contradictions of Modernity at the Turn of the Millennium* (2000), 47-60; Tim Stafford, "Famine Again? Why Some Places Suffer Food Shortages Decade after Decade," *ChrTo* 51 (2007), 42-47; Judith Ann Brady, "Justice for the Poor in a Land of Plenty: A Place at the Table," *RelEd* 101 (2006), 347-367; Farzana Noshab, "Globalization, WTO and Pakistan," *MW* 96 (2006), 341-362; Vsevolod Chaplin, "Post-Soviet Countries: The Need for New Morals in Economy," *ER* 58 (2006), 99-101; Donald Messer, "Every Three Seconds: Preaching from a Global Perspective," *Living Pulpit* 15 (2006), 28-30; Munyaradzi Felix Murove, "The Empirical Contradiction of Globalization: A Quest for a Relational Ethical Paradigm," *JTSA* 121 (2005), 4-18.

73) 詩編 69: 30。

**Abstract****Socio-Economic Context of Post-Exilic Community and Literacy**

Examining literacy is one of the most important methods for analyzing socio-economic stratification of the postexilic community in Palestine. According to Albertz, among others, considerable portions of Prophetic and Psalmic texts (for example: Mal 2,17; 3,5; 3,13–21; Isa 29,17–24; 56,9–57,21; Ps 9/10; 12; 14; 35; 40; 69; 70; 75; 82; 109; 140) were written by an impoverished group to consolidate their identity and to retaliate against the power elite in Jerusalem at that time. Many current OT scholars advance the notion of a »theology of the poor« in exilic and postexilic Israel. Employing Gerhard Lenski's sociological theory of »advanced agrarian society, « this article questions the validity of the thesis and argues that the »theology of the poor« was mainly generated by a middle class of postexilic Israelites like Levites and Hasideans, not by the penniless underclass, such as farmers, peasants, shepherds, craftsmen and artisans. It also pays special attention to the theological and ethical implications of »theology of the poor« for our post-modern and post-colonial era.